

---

# とある少年の正義の法則

アルト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある少年の正義の法則

### 【NZコード】

N69920

### 【作者名】

アルト

### 【あらすじ】

学園都市の桜川中学校に通う少女、桜木朱音はとある事情でレベルのはずの少年、植木恭介が能力を使っているのを発見する。

しかし、それは学園都市の能力とは根源が違う、全く別の能力だった。

### 『注意』

この小説には「都合主義」たり、「オリ主」たり、「厨二病」が入つ

たりする可能性があります。

それらが嫌いな方はご注意ください。

作者はじめての小説です。

## ～植木恭介の法則（前篇）～（前書き）

更新は遅いと思いますが、よろしくお願ひします。  
ああ、時間がほしい。orz

## （植木恭介の法則（前篇））

超能力が科学的に解明された世界。

以前はあるかどうかもあやふやで、空想的な概念だつたものが  
カリキュラムを受けることで得ることができるようになった世界。

そして超能力の研究、能力開発を行う『学園都市』が建設された。  
特色ある一三三区からなり、人口一三〇万人、東京都の三分の一相  
当にもなる超巨大な都市である。

学園都市というだけはあり、膨大な数の教育機関が存在しており  
子供たちが日夜能力開発にいそしんでいる…

\* \* \* \* \*

ここは柵川中学校。

温かい陽気が降り注ぎ、ついあぐびが出てしまいそうなくらい天  
気がよい春の季節。

最近入学式が終わつたばかりで、新入生たちが新たな学校生活に  
期待をふくまらせ青春を謳歌しようと思いを巡らせる。

今は授業中のなか休み時間中友達と会話する時のような楽しげな  
声は聞こえない。

「で、あるからして自分だけの現実の獲得は…」

「……寝むい」

一年生の教室の一つで生徒達が黙々と教師の授業を聞いている。  
そのなかで、頭がかくかく揺れており今にも寝そうな生徒が一人。  
緑髪でボーッとした瞳、若干シンシンした髪からはひと房だけ尻

尾のように腰まで伸びている。

… いまにも鼻提灯を出し、机に突つ伏してしまってそうである。

そんな少年を後ろから注意深く見つめる… と、いうか、睨みつけている一人の少女がいた。

まるで一拳一動を逃すまいとしているかのようだ。

「植木恭介… あなたの秘密、暴いてやるんだから…」

そう意気込む緋色っぽい髪のポニーテールの少女… 桜木朱音さくらねあかねはそう呟いた。

なぜ少年を親の仇のじとく睨みつけてくるその理由は、一週間ほど前にさかのぼる…

\* \* \* \* \*

「待てやこのガキー！」

「待てと言われて待つ馬鹿はいないわよ！」

日が落ち、街路灯で照らされた学園都市で一人の少女と四人の男が盛大な追いかけっこをしていた。

少女の手にはスーパーの袋が握られており、買い物の帰りだとうことが分かる。

「あーもうーなんでこんな状況になっちゃうかな…」

トホホ、これまでの行動を思い出しながら物思いにふける。

少女：朱音は学校から帰り、冷蔵庫の中身がないことに気づき買い物に出かけたのだが

いろいろ買い物ししている間に夜深くなってしまった。

買い物に満足し、スーパーから出た後男たちに絡まれている少女を見てしまったのである。

誰かに助けを求めている少女を見捨てるわけにはいかない。

男にタックルをかまし、少女を逃がしたまでは良かったのだが、恨みを買つてしまい

一大逃亡劇を繰り広げているのである。

「いい加減に諦めなさいよ！」

そう叫びながらも、走り続ける足は止めない。

バックからは止まれーだの、待ちやがれーだの罵声が聞こえてくる。

どうにかして逃げ切らねば……と考えるも策もなにも浮かばない。そしてついに体力的に限界が近づき、袋小路に入ってしまったところで追いかけっこは終了した。

「も、もうにげられねーぞ！覚悟しやがれ！」

「なによ、あなたたち恥ずかしくないの！？

女の子を多人数で囮むわ、追いかけまわすわ

恥を知りなさいよ！」

ビシイ！と指を突き付け、積もり積もった文句を浴びせる。

追いかけまわされるわ、理不尽な暴力をうけそになるわ、いいかげん堪忍袋の尾が切れそうなのである。

「うぬせーー」の呟みしつかつとほりせてもひづーー」

そう男は言い拳を振り上げる。

万事休すか…と思いつをつむつた瞬間。

ゴスツーー

「がはッ！？」

「は……？」

男の頭上から快音がするとともに、奇声を上げつつ男が倒れこんだのだ。

朱音が何もしていらないのにもかかわらず。

いつたい何が起こったのかと、朱音は暗いなか必死に木を凝らした。

「木……？なんでこんなところに

つていうかどうしたらこうなるのよ……？」

木を凝らしたところ、男の頭上に木が覆いかぶさっていたのだ。これから察するに、この木が男を氣絶させたのだろう。まるで、木の幹が折れて倒れてきたときのように。しかし、このあたりに木やそれに値するものは一切植えられていない。

「あべしーー？」

「うぬせーー？」

朱音が木の所在について思考を凝らしている間に、 どんどん不良たちが倒されていく。

つには全滅してしまい、男たちの鈍痛に対する「めき声」で夜中の路地裏に埋め尽くされる。

朱音がいつたい誰が、と不良たちの後ろを見る。

そこには暗闇でよく見えないが緑髪の少年かいたたぶんこの少年が助けてくれたのだらう、と見当た

ମୁଖ୍ୟମନ୍ତ୍ରୀଙ୍କ ପାଇଁ ଏହାରେ ଆଜିର ଦିନରେ କିମ୍ବା ପରିବର୍ତ୍ତନରେ ଆଜିର ଦିନରେ ଆଜିର ଦିନରେ ଆଜିର ଦିନରେ ଆଜିର ଦିନରେ

…が、そこで予想外の事態が発生した。

あれからとか、少年はぐるりと反転すると、勢いよく逃げだした  
のだ。

すぐさま追いかけたが、見失つてしまふ。

「あわやー、見失つちゃつたー…でも、あの顔どいかで見たよつな  
……」

袋小路では暗くてよく見えなかつたが、表通りに出た時に一瞬

自身の記憶を掘り起こし、そして一人のクラスメイトに思い当つ

た。

「植木恭介……？でも、あいつレベルのハズじや……？」

能力者は能力のレベルによってランク付けがされる。

上は5、下は0と数字が増える」とに能力が強力になつていいく。レベル5なんて学園都市に七人しかいないほど希少な存在なのだ。そのレベルにもなると、軍隊とも渡り合えるほど強力になるので

ある。

ちなみにレベル〇は学生の六割近くを占めており、朱音もその一人である。

自身の記憶が確かなら、植木恭介はレベル〇のはずである。

レベル〇は能力を使えず、使えたとしても微弱で検知が難しい。わつきのような、木を生やすなど到底無理なのである。

(あいつはレベル〇……でも能力を使った、一体どうことなの?)

レベル〇なのに能力が使えるという矛盾、それがどうしても気になる。

元々、朱音は好奇心が旺盛なほうである。

本能がろくでもないことが起きると警鐘を上げるが、それ以上にその類まれな好奇心が本能を押しのける。  
そして決心する。

「……こいつなつたら、徹底的に調べてやるんだから!」

\* \* \* \* \*

(で、いろいろ調べてみたはいいものの、全く情報がないのよねー

…)

朱音は眉間にしわをよせ、途方に暮れる。  
あれからあちこち調べてみたのだが、全くそれらしいことは見つかなかつたのである。

ネットのその手のサイトや、都市伝説系統の本もしらみつぶしに探したのだが

一向に見つからない。

拳句の果てに風紀委員シャッジメントなどが利用しているとある「テーブース」にハツキングまでやらかしたのだが

何者かに阻まれてしまい、何も情報が得られなかつた。

そんなこんなで万策尽きてしまい、現在進行形で五里霧中なのである。

だが、ここまで来て引き下がるわけにはいかない。

朱音はそう考え、あまりいいとは言い得ない頭をフル回転させ思考をまとめ、そして…

「ひななつたら、放課後あいつについていてボロが出るまで付きまとつてやる！」

…ひらめいた。

逃げたということは、人に知られたくはないということ。

ならば、植木が能力を使つたところで問い合わせればいいのだ。

ふつふつふ、といきなり笑い出し怪しい顔になつた朱音を見て回りのクラスメイトは

ギヨッとした顔になる。

完全に危ない人を見る目線だ…

そして時間は過ぎていく。

穏やかで、騒がしくて、大切な時間。

「植木恭介！起きなさいーーー！」

「……んあ？ つていつてえ！」

そんな中、朱音に睨まれていることに気づかずぐーすか寝ていた植木は教師にゲンコツをくらい悶絶していた：

\* \* \* \* \*

放課後：

授業が終わり、生徒たちがいそいそと学校から出て行っている。ある人は友達と遊びに、またある人は学校に残って勉強したり。それぞれが思い思いの行動をしている中、異端な行動をしている少女が一人：

「さーてあいつ、いつ能力を使うかしらね…」

そうつぶやき悪い顔をしている朱音。

電柱に隠れながら、植木の追跡をしていた。

コソコソしながら植木の死角を歩き、さながらどごぞの推理漫画の初期の迷探偵のようだ。

…他の通行人からはまたもや珍妙な人を見る目で見られている。

ちなみに、とうの重要な参考人、植木は信号待ちで立ち止まっている。

(にしても、なんであいつ能力を隠すのかな…  
あそこまでの能力ならレベル3くらいはいきそなのに)

ふと、朱音の中に疑問が浮かぶ。

学園都市では、レベルによって待遇が変わる。

レベルが高くなるにつれ、奨学金が多くもらえたりするのだ。  
1レベルでも侮るなれ、一つのレベル差が能力者同士にかなりの貧富の差をもたらす。

一定のレベルがないと入れないエリート校までもが存在するのだ。  
有名どころで言えば、ときわたい常盤台中学やながでんじょうき長点上機学園であろう。  
他にもメリットがあり、能力レベルこそが絶対といつても過言ではない。

なのに、なぜ植木は能力を身体検査システムスキャンで使わないのか。

(私なんて、ほしくても手に入れることができないのに……)

そう考へ、顔を伏せて悔しさで歯をかみしめる。  
むなしさと悲しさで胸がいっぱいになる。

せっかく、夢を叶えるためにここに来たのにいまだ叶えられず。

小学生のころから頑張つても頑張つても、レベル〇のまま。

能力は才能がものを言つ面が強いが、才能がすべてではないと考え頑張つてきた。

だがそれでも能力はレベル〇、一向に進展する気配がない。

思考が暗く、重くなつていき思考の渦にとらわれそうになる。

「……つていけない、今こんなこと考へてもしようがないよね  
才能がなくても頑張れば何とかなるーそれが私のモットーよー！」

首をふり、暗い思考を振り落とし追跡のほうに専念すべきだと朱音は思考を変える。

そして顔を上げ植木の追跡を再開しようとした。  
が、しかし。

「つてあれ……？もしかして、見失ったー！？」

そう叫び、愕然とする。

先ほどいた植木は忽然と消えていたのだ。

…先ほどの思考の渦にとらわれている間にどうかにいつてしまつたようだ。

「さつさと見つけ出せないと、私の計画がパーだー！」

まだ遠くにはいつてないはず。

そう考え大慌てで植木を追うべく走り出した。

\* \* \* \* \*

「あーもーーあいつどこに行つたのよー……」

あいつひひ探し回り、時はすでに四時過ぎである。  
どこを探しても目的の人物は見当たらず、他にどうすることもできずにここまで来てしまいしがないので公園で休むことにしたのだ。

自販機でジュース イロモノっぽいラベルが付いた を買つた朱音はベンチに座り  
ふう、と息を漏らす。

そして朱音が缶のふたを開けようとしたとき、公園に聞き覚えのない男の怒声が響き渡るのに続いて聞き覚えのある少年の声が響いた。

「てめえなめてんのか、ああー？」

「だからさつきから言つてるだろ。そいつをはなせよ、嫌がつてる

じゃん

朱音はいきなり響いた声に驚き、うつかり缶を落としそうになつたが寸前で耐えきりほつと息をついた。

そして何事かと声のしたほづへ顔をむけたといふ、見知った顔が目に入る。

「ああ、何だテメエ」

「やんのかこいらあーー！」

（あれって……植木？あいつ何してんのよ）

不良らしき男たちに罵声を浴びせられ、それでも堂々と立つている少年は間違ひなく植木だつた。

不良たちの後ろにはかすり傷がある高校生くらいの少年が倒れており、どうやら植木はこの少年を助けようとしたようだ。

植木は脅されてもどこ吹く風で相手を睨みつける。

朱音はなんとかしないと、と焦りつつ同時にある期待が生まれていた。

（もしかしたら、能力を使うかもしれない……これはチャンスね！）

朱音はそう考え近くにあつた自動販売機の後ろに回り込み、ばれないように息をひそめた。

男たちの数は八人程度、いくら強くても一人でさばき切れる数じゃない。

ならば絶対に能力を使わざるを得ないはずだと朱音は考えたのだ。そのチャンスを逃すか、と目を凝らす。

「だーかーら、さつさと放せつて言つてるんだって。そいつ嫌がつてるだろ」

「「」のガキ……調子に乗りやがつて……！」

それでもペースを崩さない植木についに煙草を吸つている男がしひれを切らし、拳を振り上げる。  
無慈悲な暴力が植木に向かう。

…来るかーと朱音が身構えた瞬間

鈍い音を立てて、植木の顔がぶち抜ぬかれた。

「……あれ？」

「おらあー！調子に乗つてつからーこうなるんだよー！」

「何もできないくせに出しゃばつてんじやねえよー！」

（あ、あつたつやられたーー）

あんまりな事態に朱音は顔面蒼白になりつつも突つ込みを入れる。  
どこか哀愁が漂い、嘆きたくなるような雰囲気だ。  
能力を使うかと思いきや、そぶりも見せずになつたつとやられてしまつたのだから致し方ないかも知れない。

そのまま植木はもできずぼーぼこにされてくる。  
ゲシゲシッと足蹴にされたつきの勢いはどこに行つたんだ、と朱

音の声えが頭をすざいる。

「ちゅうとあんた達ー…そいつを放しなさこよー。」

「ああ？ 今度は何だよ。」「この仲間か？」

さすがにこれ以上はまことに考えたのか、朱音は助け船を出す。すると心底煩わらしそうに男は足元の植木を指差し、そう問い合わせる。

…どうでもいいが、少年の格好は非常に情けない。

「そりや、せつきから見てたら多人数で一方的になんて。恥ずかしくないの？..」

朱音は助けに入ったはいいが内心かなり焦っていた。  
男たちをどうにかする手段が何一つとしてなく、逃げるにしたつて植木を

回収しなければならないこの状況は非常に不利であるからだ。

ああ、なぜこうなってしまったのだろう、と朱音は自身の不幸を呪つた。

「ちゅ、さつきからうぜえ奴ばかり出できやがるな……  
とつあえずやられとナシー。」

不良はそう言い放す、咥えていた煙草を捨てると朱音に襲いかかる。

ああ、こんなこと前にもあったなあ…と朱音はトジャビュを感じつつ目を瞑る。

しかし、その行為が最後まで行われることはなかつた。

「おい、お前の相手は俺だ!!……そいつじゃねえって」

当たる寸前のところで止まる。

男が振り向くとそこには緑髪の少年…植木が立っていた。怒りを失つていない力強い瞳が男を貫く。

「ああ? オメエは後だ、そこでびくびく震えてろ! 後でこここいつと同じにあわせてやるからよー!」

そう言って朱音のほうをむきなおすとまた襲いかかろうと始めた時、植木は行動を起こした。

いきなりしゃがみ込むと、先ほど男が落とした”煙草”を拾い上げる。

(あんなの拾つてどうするんだろ?...?)

朱音はこいつらに向かってくる脅威には目もくれず、植木の行動にくぎ付けだった。

植木は男を睨みつけつつ先ほどの煙草を”手で包む”そして 能力が発動した。

手から縁の眩く光が溢れだし

植木の手から現れたバット状に成形された木での全質量がのつたスイングで  
男の意識を刈りとった

「だから、お前の相手は俺だって。そいつじゃねえよ」

朱音を指さした後、作り出した木を肩に担ぎ、事も無げに男に対してそう言い放つ。

そして、さて次はどういふだと言わんばかりに回りを見渡した。

先ほど殴り飛ばした男は白目をむき完全に伸びている。

「一瞬あたりが静寂に包まる。

男たちはいつたい何が起きたのかわかつていなか、口をあんぐりあけて石造のようく固まっている。そして一人の男がぼそつとつぶやく。

「「、「い、こいつ能力者だ……！」

能力者の強さはどこでも知られており、それに勝とうなんて考える無能力者はいない。

レベル3あたりでもかなり理不尽なのに、レベル4や5なんてのは化け物級なのだ。

学園都市の最上位に位置する一方通行なんかは戦術核も効かない

とさえ言われている。

「能力者なんて相手にしてられつか！」

「うわああああ……！」

一人の能力者だという声を皮切りに状況把握ができたのか、次々と男たちの顔が真っ青になる。

そして蜘蛛の子を散らすように男たちは逃げて行つた。

「あ、おい！こいつに謝つていけよ……つてもう逃げたのか、はやいなー」

そう植木は言葉を荒げるが、もつすでに男たちばかり豆粒のよつよつ

つていた。

心なしか、最後のはつは若干の感心を含んでいたよりも聞こえる。

…そんなところでの感心は男たちも欲しくないだらうと思つたのが。

そして、その視線を茫然とし、へたり込んでいる朱音に向ける。

「誰だかしらねーけど、助けてくれてサンキューな。じゃあなー」

何事ともなかつたかのように朱音に礼を言つとくつと方向転換し、植木はさつさと帰ろうと公園の外へと歩みを進める。しかし、それは途中で中断させられた。

いつの間にか立ち上がった朱音に手を力強く掴まれ、帰ろうと歩む足を強制ストップさせられたからだ。

植木が疑問に思い、朱音のまつを振り向くと同時に

「あんたレベル〇なのにビーして能力使えるのよ！

そもそもあんな手から木を出す能力なんて聞いたことないしおーかあんた本当にレベル〇！？」

「ぐ、ぐるじー……何言つてるかわからん上に気持ち悪くなつてきた……」

肩を掴まれてブオンブオンと揺さぶられながら一気にまくし立て上げられた。

とりあえず能力関係のことは全部吐け、早く吐け、とにかく吐けと言わんばかりだ。

その間揺さぶられまくっている植木はたまたものではない。知っていることを吐く前に別のものが出そうである。

「あーあ、ついにばれちゃったんですね……  
あれだけ能力は他の人に見られないよつこじゅうて言つたのに……」

「！？」

植木がいろいろリバースしそうになつたその時、一人のものではない少々怒りと疲れがこもつた第三者の声が響いた。

「あ、よつちやんだ。元氣にしてたかー？」

「元氣にしてたかー、じゃないですよーあれだけ散つゝ々言つたのこじうしてあなたは……」

植木に空氣を読まない言動に、よつちやんと呼ばれた男 スーツを着た平々凡々な格好をしている はこめかみをぴくぴくさせながら植木に怒鳴つている。

…結構ストレスがたまつてそうである。

植木に対するストレスの多さは散々を言つときの間のとり方で測りとれる。

このまま朱音を放置しながら説教が続きそうになつたのだが。

「あ～ん～た～ね～……」

植木に対するお説教タイムは朱音の声にて中止される。  
よつちやんがあたかも怨念のような声にビクウーと体を震わせる。

ガミガミと、植木に苦言を言つのに気をとられていたせいで今まで全く気付かなかつたのだ。

そして油が切れたブリキ人形のようになろに向くとそこには、この世のものと思えない邪悪な顔 といふか顔が文字どおり鬼のようになつてゐる 朱音がいた。

「一体どうこうとか、きつちつ説明してもううわよ——。」

「は、はいいいい！」

公園に男の微妙に情けない声が響くとともに、鳥がバサバサと大声に驚いたようで飛び立つていった……

## ～植木恭介の法則（前篇）～（後書き）

小説は書いたの初めてなのですが、かなり緊張します…  
時間ができたらいちまちま手直しとかしたいですね

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6992o/>

とある少年の正義の法則

2010年11月4日02時41分発行